

再起

三重県 高田高等学校 三年

長崎 桃子

聖書に出てくるお話みたいに、今私が処女受胎したんなら、きっとそのはらわたに溜まった羊水は、うちのためのものであつてほしい。子供を産めるんなら、うちは自分の子宮でもいちどうちを産み直したい。そうして生まれてきた私をめいいっぱい抱きしめて、産毛のなびくその額にキスをしたい。

昔はぜんぶがうつくしく軽かった。子どもがよく跳ねるのは、そういうこと。布団にくるまって耳を塞げば、きたないとこなんてない、光をいっぱい髪に蓄えさせた、子どもたちの笑い声が波のように重なつてはほどけ、遠くにいつてしまう音がした。

大人になるんは、成長するんは、私がわたしでなくなるような気がしてならなかった。勉強して、喧嘩して、泣いて、泣いて、歩いて、そうやってしとるうちに、気付く。はっと横を向けば、うちの身体から幼い頃の私が幽体離脱しとつて、まっつて、まっつて、とうちが言えば、軽いステップを踏みながら彼女は行つてしまふ。それからうちは、臍げに、幼い頃の記憶、匂い、光を思い出しては、泣いとるはつかしや。

やからな、うちを産み直して、もいちど、うちに言いたい。今のその期間は、神様の贈り物やから、大事に、だいにしなかん。大人になつてからも、その記憶で己を慰められるように、大切にしとかなかんねやで、ももちゃん。

でもそんなこと、できるわけなくて、結局うちの子宮は、うち以外の赤児のためのもんやから、それが惜しい今、うちはただ、布団の中で自分の身体を抱きしめつづける。